2016-2017
Rotary 週報
国際ロータリー第2720地区
大分1985ロータリークラブ

第 8 回　　平成 28 年　9 月　5 日　　No.1399

会　長　吉　良　昌　一
幹　事　穐　田　英一郎

例会日／毎週月曜日 12:30～
例会場／トキハ会館 4F
TEL 097-532-0611
FAX 097-532-8386

Email：oita1985rc@mist.ocn.ne.jp
ホームページ：www.oita1985rc.jp

会長スローガン

「誠心誠意」

2016－'17年度
国際ロータリーのテーマ
「人類に奉仕するロータリー」

人類に奉仕するロータリー

R　I　会　長	ジョン・ジャーム
RI第2720地区ガバナー	前　田　眞　実
大分第4グループガバナー補佐	工　藤　　隆

■ 本日のプログラム（9月5日）

12:30	点　鐘	
	会　食	
	ロータリーソング	「奉仕の理想」
	ゲスト･ビジターの紹介	会　長　吉　良　昌　一
	会長の時間	会　長　吉　良　昌　一
	出席報告	出席担当　大久保　修　身
	幹事報告	幹　事　穐　田　英一郎
	ニコニコタイム	高　野　　太
13:00	高清水　理奈子様	
	（シェアソムリエ・ワインバー「ヴァンチャット」オーナー）	
	「ソムリエ目線～ワインの楽しまれ方」	

＊ 今週のお祝い
在籍記念日　高山泰四郎会員（S 55.8.14：37年）

■ 第7回例会の記録（8月29日）

「バーナード･リーチと小鹿田焼」大久保　修身会員

・出席報告（8月29日）

会員総数	16 名
8 月　29 日	
出席免除	2 名
出席会員数	12 名
出席率	75.00 %
ゲスト	4 名
ビジター	23 名
8 月　7 日	
修正出席率	81.25 %

（サインのみ受付）

ロータリーソング　【奉仕の理想】

奉仕の理想に集いし友よ　めぐる歯車いや輝きて
御国に捧げん我等の業　永久に栄えよ
望むは世界の久遠の平和　我等のロータリー

会長の時間（9月5日）　会　長　吉　良　昌　一

「クジラの思い出」

昭和30年代、私が小学生の頃、学校の授業では日本の捕鯨の歴史と捕鯨産業についてしっかり教えていた。そのせいで、給食に出るクジラ肉を食べる時は遠い南氷洋に思いを馳せた。

昭和38年親戚のおじさんが捕鯨船団の捕鯨母船に乗組むことになった。親戚一同で駅に見送りに行った。まるで映画で見る出征兵士を見送る様な、みんなで万歳三唱した記憶がある。なにせ行き先は南氷洋だから正に地の果て。そう、決して大袈裟な見送りではなかったのだ。おじさんが船長から受けた注意は「皆から嫌われない様にしてくれ、でないと南氷洋の藻くずになるから」だったとか。

半年程して、おじさんが南氷洋から帰郷した。なんでも給料としてもらったのは80万円ほどだったと言う。当時としてはベラボウな金額である。おじさんは、たくさんの塩クジラや缶詰、それにマッコウクジラの歯やナガスクジラのヒゲを持ち帰り、珍しいやら美味しいやらで親戚中が大喜びした。当時クジラ肉は安く、しかもたくさん流通していて日本人なら誰でも食べるごくありふれたものだった。缶詰、ベーコン、甘露煮、冷凍の生肉はステーキにしたり、刺身で食べたりした。また、学校の給食ではよく竜田揚げが出た.。まだ凍った刺身を口の中に入れた時のえも言われぬ味、クジラ以外白菜しか入れないすき焼きがまた抜群に美味しかった。ベーコンもよく食卓に上ったが、こちらはもっぱら父の酒の肴だった。私もベーコンで一杯やりたいが、現在ではとても高価だ。上等なものでは、たばこ一箱くらいのブロックで三~五千円くらいするから手が出ない。

今では食べることもかなわないシロナガスクジラやナガスクジラ。しかし、あの当時、日本人の重要なタンパク源になっていたのがクジラだった。

昭和30 年代、クジラは確かに日本国民と共にあった。

■ 次週の例会（第9回　9月12日）

卓話　衛藤　昴 様

〈例会予定〉

9月26日（月）	R財団･米山セミナー報告（コンパル）
10月　3日（月）	米山奨学生の卓話

〈卓話の時間〉　大久保　修身会員

バーナード・リーチと小鹿田焼

六月初旬、長野県松本市立美術館で開催されたバーナード･リーチ展に行って来ました。

バーナード･リーチは世界的に有名なイギリスの陶芸家で展示物はすべて東京目黒にある日本民芸館の所蔵品ということでした。バーナード･リーチの作品は大分県立美術館オープン時に 3 点展示されていました。その時の陶芸作家は他に浜田庄司、河井寛次郎、北大路魯山人や江戸時代の京焼の尾形乾山など有名作家のものばかりでした。

松本では絵、やきもの、木工品など 100 点あまりあり、見ごたえのある展示会でしたので充分堪能させていただきました。

リーチは香港で 1887 年に生まれ、すぐに母親が死亡したため、京都の同志社で教授をしていた祖父母に引き取られ、京都や彦根で育ちました。その後、イギリスに帰り、16 才の時、美術学校に入学、高村光太郎と出会い、光太郎の紹介で明治 42 年に来日、志賀直哉らと雑誌 “ 白樺 ” に参加、多くの友人をつくる。友人の一人の陶芸家富本憲吉とある茶会に招待され、初めて京都の楽焼の茶わんに出合い感動、陶芸の道に進むことになり、6 代乾山に師事、作陶を始める。

日本での後見役の柳宗悦を始め、陶芸家の浜田庄司、河井寛次郎、富本憲吉、染色家の芹沢圭介、版画家の棟方志功、茶道、武者小路千家家元の千宗屋らとの交流、東洋と西洋の橋渡し役を自任し作家活動を続ける。

作品総じて東洋的で温和で優しく地味である。リーチは日本の 6 古窯（瀬戸、信楽、丹波、備前、常滑、越前）を始め日本中の窯場をめぐり、その場で作陶する。

大分の小鹿田焼も世界に紹介した人で、小鹿田には 2 回来ているが、2 回目は昭和 39 年 10 月、帰りに大分へ寄り、万寿寺の有名な白隠禅師の “ 緋だるま ” を鑑賞、感動する。その後、料亭 “ 菊水 ” で歓迎宴に出席、木下郁大分県知事、上田保大分市長や日本民芸協会大分支部のメンバーと交流。

小鹿田焼は素朴の中に重厚感、存在感、温もりがあり、平松大分県知事の提唱した一村一品運動の元祖と云えます。ルーツは朝鮮の役（1600 年ごろ）筑前藩主、黒田長政が朝鮮から陶工を連れて帰り、黒田藩の御用窯とした福岡県の高取焼小石原焼と同時期と云われているので 400 年以上続いている。特徴は飛鉋（とびかんな）で刻みを入れながら作る。

バーナード・リーチが世界的な陶芸家になれたのも、柳宗悦という民芸運動を始めた強力な後見人がいたことと、日本の一流の作家たちとの交流が有ったことです。柳宗悦の死を一番悲しんだのはバーナード･リーチだったと云います。柳宗悦の民芸運動に賛同して倉レ社長で有り、大原美術館の創設者である大原孫三郎は土地・建物などの資金をポンと寄付したことは有名な話しです。

昔のオーナー経営者は太っ腹だったのです。本日の資料にはリーチの作った小鹿田焼の作品、数点と万寿寺の白隠禅師のだるま図、日本民芸館のカラーコピーを添付致しました。

幹事報告

- 児童養護施設「森の木」より花火招待の礼状が届いております
- 社会奉仕・国際奉仕・職業奉仕合同セミナー開催
  日時：10月29日（土）13：00～16：30
  場所：ホルトホール大分
  対象：社会奉仕、国際奉仕、職業奉仕委員長

8月29日ガバナー公式訪問

ゲスト・ビジターの紹介

ゲスト：永楽昭八郎様、右田昭二様（玖珠ＲＣ）
　　佐藤秀隆様、臼杵徳二様（日出ＲＣ）

ニコボックス

★玖珠ＲＣ

皆さん、こんにちは。玖珠クラブの永楽です。当クラブ例会に出席するのは、20年ぶりで楽しみにしていました。10月1日の35周年は宜しくお願いします。

★日出ＲＣ

本日は宜しくお願いいたします。

★藤本　保会員（自主・2口）

玖珠ＲＣの周年行事、国際奉仕・社会奉仕合同セミナーのどちらにも都合で出席できません。お詫びにニコボックスをいたします。